

『哲学探究』において規則論と言語論はどのような関係にあるのか
What is the relationship between the rule theory and the theory of language
in *Philosophical Investigations*?

白木啓吾

Abstract

The subject of this paper is Wittgenstein's main work, *Philosophical Investigations*. The purpose of this paper is to clarify the relationship between the rule theory and the theory of language in *Philosophical Investigations*. The conclusions of this paper are as follows. His rule theory concerns the foundations of mathematics, not language in general. But he thinks that following the rules is analogous to meaning something by words. In this sense, the rule theory and the theory of language are closely connected in his philosophy.

(1) 研究テーマ

本研究の研究テーマは, Ludwig Wittgenstein (以下 L. W.) の主著, 『哲学探究』(以下 PU) における, 規則論と言語論との関係である. 本稿では 185 節から 242 節までを「規則論」と定義する. 本稿の目的は, PUにおいて「規則論」と言語論がどのような関係にあるのかを明らかにすることである.

(2) 研究の背景・先行研究

様々な主題を扱う PU のなかでも, 「規則論」はその中心的な箇所だと見なされている. そのことをいち早く指摘したのは, Kripke (1984) である.

Kripke はまず, 「68+57」という数式で規則のパラドックスを再構成する. 前提として, 私たちはこれまで 57 より大きな数で加法を行ったことがないとした. 私たちは普通, この数式に対して 125 という答えを与えるだろう. しかし, 私たちの前に一人の懐疑論者が現れる. その懐疑論者によれば, 「68+57」の正しい答えは 5 であるというのだ. 懐疑論者の言い分は以下である. すなわち, 私たちが「+」でこれまで意味していたのは, その実プラスではなくクワスであった. 今, プラスを「+」という記号で表して, クワスを「+」という記号で表すとすると, クワスは次のような関数だと説明できる.

もし $x, y < 57$ ならば $x+'y = x+y$

そうでなければ $x+y=5$

仮定から、私たちは実際に 57 よりも大きな数で加法を行ったことがないのだから、私たちが実はプラスではなくクワスを行ってきたのだという主張を否定するような事実は存在しないのである。

一度、懷疑論者の言い分を受け入れてしまえば、「68+57」の答えは 125 や 5 だけでなく、どのような数であってもいいことになる。というのも、確かに私たちは「68+57」の答えが 125 でしかありえないと主張するためのいかなる事実も持っていない。しかし他方で、懷疑論者もまた、その答えが 5 でしかあり得ないと主張するためのいかなる事実も持っていないからである。

結局、何らかの解釈を通すことで、どのような答えであっても「68+57」の答えとして受け入れられてしまうように思える。これが、L. W. の発明した規則のパラドックス (PU 201) である。

次に、Kripke はこの議論を言語一般に拡張させる。Kripke は例としてテーベアという奇妙な概念を挙げる。テーベアとはエッフェル塔の外ではテーブルを意味するが、エッフェル塔の中では椅子を意味する概念である。議論の流れはクワスと同じである。私たちがこれまで「テーブル」で意味していたのは、その実テーブルではなくテーベアであったのだ。こうして、規則のパラドックスは言語全般へと拡張される。

結局、このパラドックスが意味するところは、私たちが言葉で何かを意味するという事実は存在しないのだから、言葉が意味を持つということはありえない、というものになる。Kripke は L. W. がある新しい懷疑論を、すなわち意味についての懷疑論を発明したのだと述べている。

さて、こうした Kripke による解釈の是非については、本研究の関心ではない。本研究にとって重要なのは、数式という規則について生じたパラドックスを言語全般へと拡張させる議論である。Kripke はここで明らかに、「規則論」は言語ゲーム全般の規則を主題としているという解釈を探っている。そして、Kripke による L. W. 解釈は多種多様な批判に曝されてきたにもかかわらず、この部分を批判した者は、管見の限り、存在しない。Kripke は規則に関する議論を、言語一般に関する議論へと拡張した。この拡張には、言語が規則に支配されているという前提が隠れている。言語を用いることは規則に従うことであるという前提に立つからこそ、規則に従うことが規則のパラドックスによって危機に曝されたとき、言語一般も危機に曝されるのである。

言語が規則に支配されているという前提は、Kripke だけでなく、極めて多くの論者によって採用されている。例として、Hacker と Glock を挙げる。

「規則に従う」ことは言語制度の基礎である。ある言語を学ぶということは、規則に支配されたその言語に含まれる表現の使用に関する技術をものにすることである。知られていない、あるいは理解されていない、とした規則に従うことは不可能である。したがって、表現の意味を決定し構成する規則が、将来の発見を待っていて、知られていない、そうしたこととはありえない。(Hacker 2001, p. 59)

ある表現の言語的意味は、一般的な規則に依存している。(中略)これらの規則は、表現を正しく使用するための基準を提供する。それによって、これらの表現を使って何を言うことが有意味であるのかが決まるのである。したがって、L. W. 的な意味の規範性とは、言語的意味とあるタイプの言語的規則との関連に関する特定の主張である。L. W. によれば、ある表現の意味は、その正しい使用に関する規則によって決定される。(Glock 2009, p. 159)

このように、言語が規則に支配されているという前提は、様々に解釈を異にする多くの論者にとって、数少ないコンセンサスの一つとなっている。

「規則論」と言語論との関係に関する標準的な解釈は、この前提によって答えられるだろう。すなわち、もしこの前提が正しいのであれば、規則について問うことはそのまま言語について問うこととなる。言語が規則に支配されている以上、規則を主題とする「規則論」は言語論の一部なのである。

対して、言語が規則に支配されているという前提を否定する論者も少数ながら存在する¹。そして、この前提を採用しない論者は、上記の標準的解釈を採ることができない。こうした論者の一人である大谷(2020)は、「「規則の問題」の主題は——その名称に反して——規則ではない」(p. 126)という驚くべき主張をする。大谷の解釈では、「規則の問題において問題となっているのは、言葉の使用の正しさである」(p. 109)というのである。したがって、「規則論」とはその呼ばれ方に反して、言語論なのである。大谷の解釈から導かれる、「規則論」と言語論の関係はこのようなものになるだろう。

大谷は大きく分けて三つの論点から、標準的解釈を批判する。第一に、大谷による「規則論」の解釈では、L. W. はここで、「何かが表現の使用の正しさを「決定する」とするような哲学的像から我々を解放しようとしている」

(大谷 2020 p. 123) のである。したがって、言語が規則に支配されているという前提に立つ、「規則論」の主題は規則であるという標準的解釈は、「ウイットゲンシュタインの議論の趣旨に合わない」（同上）。第二に、言語が規則に支配されているという前提を L. W. に帰すテキスト的な根拠がない。第三に、185 節以下の議論において「規則」という語が考察の中心にあるわけではなく、この議論は「規則」という語に触れることなく再構成できる。

第一に、言葉の使用の正しさを決定しているものが何もないようと思われる事が規則の問題であると、大谷は述べる。そして、この問題に対する L. W. の応答は、「決定」という語を明確化することによって、この問題に欠陥があることを示すというものである。L. W. は「移行が代数式によって決定されている」という表現の実際の使われ方を思い起こす (PU 189)。例えば、「計算という行為に関する人々の教育による決定」や、「計算体系における変項の値の決定」のモデルが提示される。そして、このどちらのモデルも、「「+2」という表現の使用の正しさは何によって決定されているのか」という哲学的な問いを成立させるものとはならない（大谷 2020, p.119）と主張する。こうした疑似問題が生じた原因は、「決定」という語の像が不明確なまま使用されてしまったことがある。「決定」という語にはいくつかの使用モデル、すなわち像があるⁱⁱ。こうした「様々な像が互いに交差し合う結果として」（PU 191），私たちはこのような「過度な表現を使うように誘惑され」（PU 191）てしまったのである。詳述すると、人間のエラーや限界を無視する「計算体系における変項の値の決定」のモデルとそれらを考慮に入れる「計算という行為に関する人々の教育による決定」のモデルとが交差し合った結果、「数列は計算間違いや人間の計算能力の限界を超えて、神秘的な仕方で決定されている」（大谷 2020, p.116）ようと思われてしまったのであり、そこから規則の問題が生じたのである。したがって、何であれ、表現の使用の正しさを決定するものの存在を、L. W. が許すはずがないのだ。

第二の論点について、大谷は標準的解釈が論拠として引用する 199 節を分析して、この節がその実、標準的解釈を何ら支持していないことを主張する。

一度だけ、ただ一人の人間が、ある規則に従ったということはありえない。一度だけ、ただ一つの報告が行われたということ、一度だけ、ただ一つの命令が与えられたということ、あるいは、一度だけ、ただ一つの命令が理解されたということ、などはありえない。一規則に従うこと、報告を行うこと、命令を与えること、チェスの対局

をすること、これらは慣習（習わし、制度）である。／ある文を理解することは、ある言語を理解することである。ある言語を理解することは、ある技術をものにすることである。（PU 199、強調原文）

大谷はこの節において、規則に従うことが伝達や、命令、チェスの対局をすることと並列に位置付けられていることを強調する。つまり、規則に従うこととは他の「言語使用と区別され、その上で両者の類似性が問題とされているのである」（大谷 2020, p. 124）。したがって、199 節は標準的解釈を支持するどころか、それに反対しているようにさえ読めるのだ。

第三の論点について、大谷は実際に「規則論」を規則について言及することなしに再構成して見せているⁱⁱⁱ。また、185 節以下ですぐに「規則」という語は現れず、そこではむしろ「+2」という「命令」が主題であると主張する。「規則」という語が登場するのは、197 節からなのである^{vi}。したがって、「規則論」の主題が規則であるとするのは誤りであるのだ。

（3）筆者の主張

本研究では標準的解釈への大谷による批判に対しては同意する。しかし、大谷が代わりに提案する解釈に対しては、同意できない。大谷による議論は、言語が規則に支配されているという前提への反論にはなっていても、「規則論」が規則を主題としているという主張自体を否定できているわけではない。そして、大谷による解釈は以下の二つの点で不十分である。一つ目は、規則論の大部分が実際に規則に関する考察にあてられていることを説明できない点である。二つ目は、数学の基礎を主題の一つとしているという PU の序文と齟齬が生じる点である。以上を踏まえ、本研究では、言語が規則に支配されているという前提を否定しつつも、「規則論」が規則を主題としているという新しい解釈を提案する。

はじめに、大谷に反して、「規則論」はやはり規則を主題としている。その理由は二つある。

第一に、「規則論」の大部分が実際に規則に関する考察にあてられている。「規則論」は PU185 節から 242 節までを指している。そして、確かにこのうち、はじめの 185 節から 196 節までは「規則」という語が表れていない。しかし、その後の 197 節から 242 節までは「規則」という語が頻出しており、その内容からしても、規則に関する文法的考察がほとんどである。したがって、事実として「規則論」の大部分が規則に関する考察にあてられており、

このことは「規則論」が規則を主題としていることを示している。

第二に、「規則論」は数学の基礎論であると考えられる。PUの序文において、L. W. は PU で扱う主題として、数学の基礎を挙げている。そして、この「規則論」が、数学の基礎に該当すると考えられる^v。また、PU の内部では、この「規則論」の他に数学の基礎に該当すると言えそうな議論はない。ところで、大谷の解釈するように、「規則論」の主題が規則ではなく、言葉の使用の正しさであるのであれば、「規則論」は数学の基礎を主題としているとは言えなくなる。そうすると、PU 内部に数学の基礎を扱っている箇所がなくなってしまう。したがって、PU の序文と本文との間に整合性を保つためには、「規則論」が数学の基礎を主題としていなければならず、つまり「規則論」は規則を主題としていなければならないのである。

さて、次に PU における「規則論」と言語論との関係について述べる。規則と言語は以下の二つの仕方で関係している。

第一に、一部の言語使用は実際に規則に従って行われている。もっとも身近な例を考えれば、外国語の習得が挙げられる。外国語を習得する際は実際に、教科書に載っている文法規則や辞書に載っている語同士の対応規則を参考にして、言語使用が行われる。こうした意味で、一部の言語使用は実際に、規則を基にして行われる。また、あらゆる言語使用は規則によって評価・訂正・説明・教示される可能性を有している。こうした意味であれば、規則は言語使用の基礎にあると言うことができる。ただしこの表現には注意が必要である。ここで述べているのは、あらゆる言語使用が規則によって評価等をされる可能性を有しているということであり、実際にあらゆる言語使用が規則によって評価等をされているわけではない。また、より重要なこととして、すべての言語使用を一挙に規則によって評価等することは不可能であるという事情がある。規則によってある言語使用を評価等することはそれ自体が一つの言語ゲーム、あるいは言語使用であり、したがって、このゲームを営むためには（少なくともこのゲームを営んでいる間は）規則による評価等から逃れている言語使用が必要なのである。

第二に、規則に従うことは言葉で何かを意味することとアナロジーの関係にある^{vi}。これは、言語活動をゲームになぞらえる PU の核となる方法論の延長線上にあるものだと言える。PU の中で明示的にこのアナロジーを語っているのは、238 節である。

私にとって規則がそのすべての帰結を前もって生じさせていると思

えるためには、それら規則からの帰結が私にとって自明でなければならない。それは、この色を「青」と呼ぶことが自明であるのと同じように自明であるのでなければならない。（PU 238, 強調原文）

L. W. は規則に従うことを分析するなかで、規則はそのすべての帰結を事前に生み出している、と私たちが思う傾向があることを指摘した。例えば、「+2」という規則は、私たちが実際にその規則に従って数を記述する以前からすでに、その規則からどの数を書くことが導かれるのかが決まっている、そのように考える傾向が私たちにはある。そして、私たちがそのように考えるということは、ある規則からある行為をすることが、私たちにとって自明である必要があると、L. W. は指摘する。

ここでは、規則からその帰結が生じることの自明さと、この色を「青」と呼ぶことの自明さとが比べられている。この色を「青」と呼ぶことは言語使用の一つであるから、ここで L. W. は規則に従うことと言葉で何かを意味することとを比較しているのである。このことから、規則に従うことと言葉で何かを意味することとがアナロジーの関係にあると、L. W. が考えていたことが分かる。そのため、規則に関する考察は、類推を通して、言語に関する考察の一部となる。また、この節は言語が規則に支配されているという前提に対する反論にもなっている。というのも、もしこの前提が正しいのであれば、言語使用は規則に従うことの一部なのだから、この色を「青」と呼ぶことも規則に従うことの一部となる。しかしそうなると、ここで行われているアナロジーが成り立たなくなってしまう。規則に従うことと言葉で何かを意味することとが並列の関係にあるからこそ、アナロジーは成立するのである。

（4）今後の展望

今後の展望として、以下の二つが挙げられる。第一に、言語が規則に支配されているという前提をより詳しく検討する。本研究ではこの前提を否定したが、PU の一部分しか扱っていない点で、この論証は不十分である、この前提は L. W. の後期哲学全体に関わるものであるため、PU 全体や、その他の著作にまで分析対象を広げて考察する必要がある。第二に、規則に従うことと言葉で何かを意味することのアナロジーは、今後一層注目されるべきである。既存のほとんどの解釈は、言語が規則に支配されているという前提に立っているため、このアナロジーは見逃され続けてきた。今一度、このアナロジーに着目して後期ウィトゲンシュタイン哲学を捉え直す必要がある。

注

ⁱ このような論者としては、野矢（2022）、大谷（2020, 2014）、Glüer & Wikforss（2009）、Hanfling（2002）などが挙げられる。

ⁱⁱ 大谷は像とモデルを使い分けている。しかし、ここでは簡単のために、これらを同一視して議論を進める。（大谷 2020, pp. 57-65）参照。

ⁱⁱⁱ （大谷 2020, pp. 109-121）

^{iv} この指摘は、（Hanfling 2002, p. 62, note. 20）でもなされている。

^v 鬼界彰夫（2016）参照。

^{vi} Glüer & Wikforss（2009）もこのアナロジーを指摘している。

（5）参考文献

- Glock, H-J, 2009, "Meaning, rules, and conventions." In E. Zamuner and D. K. Levy. (ed.), *Wittgenstein's Enduring Arguments*, London and New York, Routledge, 156-178.
- Glüer, K. & Wikforss, Å, 2009, "Es braucht die Regel nicht: Wittgenstein on rules and meaning." In D. Whiting (ed.), *The Later Wittgenstein on Language*, Hampshire, Palgrave Macmillan, 148-166.
- Hacker, P. M. S, 2001, "Wittgenstein and the autonomy of humanistic understanding." In R. Allen and M. Turvey (ed.), *Wittgenstein, Theory and the Arts*, London, Routledge, Reprinted in P. M. S. Hacker, 2001, *Wittgenstein: Connections and Controversies*, Oxford, Oxford University Press, 34-73.
- Hanfling, O, 2002, "Does language need rules?" In O. Hanfling, *Wittgenstein and Human Forms of Life*, London and New York, Routledge, 51-65.
- Kripke, S, 1982, *Wittgenstein on Rules and Private Language*, Harvard U. P.
- Wittgenstein, L, 2009, *Philosophical Investigations revised 4th ed*, Hacker, P.M.S. & Schulte, J. ed, Wiley-Blackwell.
- 大谷弘, 2014, 「言語は規則に支配されているのか」, 『哲学』第 65 号, 日本哲学学会, pp. 135-150.
- 大谷弘, 2020, 『ウィトゲンシュタイン 明確化の哲学』, 青土社
- 鬼界彰夫, 2016, 「『哲学探究』の「序文」を真剣に読む」, 『哲学論叢』43 卷, 京都大学哲学論叢刊行会, pp. 14-26.

野矢茂樹, 2022, 『ヴィトゲンシュタイン『哲学探究』という戦い』, 岩波書店

(中央大学)